乳幼児の音楽表現教育における感情に着目して

Focusing on Emotions in Music Expression Education for Infants

島川 香織*
Kaori SHIMAKAWA

抄　録

乳幼児にとって音楽性は、周囲の人たちとの音楽表現をやり取りをしあうなかで表れる。保育者と乳幼児との相互作用が、音楽教育の基盤となる感情の発達に重要である。保育者は、乳幼児の自己意識の芽生えを見守り、音楽表現における乳幼児の創造性に配慮しながら乳幼児の自己意識を尊重することが大切である。

Ⅰ　はじめに

感情あるいは情動を構成的に定義することは難しい。[1)] 荘厳舜哉によれば、情動や感情を伴う「こころ」を生み出すニューロンの情報処理過程をリアルタイムで解析できず、仮にできたとしても、個人に生じた人の主観でしかないものに質的あるいは量的に明確な定義を下すことはそもそもできないのである。

それでは、本論で取り上げる幼児の音楽表現における音楽とは、一体どのようなものなのであろうか。音楽は、日常意識せずとも、わたしたちの生活に根づいている。スーパーマーケットや商店街、駅などの公共施設、病院でも音楽が流れていることがとても多い。谷口高士(以下谷口)によれば、音楽はある場面では間接的コミュニケーションの手段ともなり得るが、むしろ(音楽)自体が目的であるような性質を強くもち、(音楽を)作ること、奏でること、歌うこと、聴くこと、それぞれが目的なのである。[2)] 谷口は、音楽の芸術的側面のみを追究するのは、音楽家やクラシック音楽愛好家などの限られた人々であり、多くの人は、音楽の感情的な側面を重視しているのではないかとしている。[3)] 谷口によれば、音楽の感情的な側面とは、娯楽や環境としての音楽と人間の関わりのことであり、娯楽としての音楽との関わりは、音楽を聴いたり演奏したりすることを楽しむことが中心であり、人によって抑鬱的な音楽を好む場合もあるが、必ずしも快の感情だけと結びつくものではないが、基本的には快の感情を伴う。カラオケで歌ったり、ステレオやヘッドホン・ステレオで自分の好きな音楽を聴くことは、どちらかといえば積極的な音楽との関わりであり、比較的大きな感情の変化を伴うとしている。谷口は、環境としての音楽との関わりについて、仕事や勉強、読書をしながら比較的少音量で音楽を聴いているときや、オフィスや病院などで流れているBGMとしての音楽は意識されるかされないかといった程度であり、音楽に向けられる注意は小さく、音楽と

＊関西国際大学教育学部　教育総合研究所学内研究員

の関わりは、どちらかといえば消極的で感情の変化も比較的小さいとしている。ただし、ドラマや映画の各場面で使われる背景音楽などのように、関わりとして受け身であっても、比較的大きな感情の変化をもたらす場合もあるという。

本研究では、このように人々の生活において感情の変化を大なり小なりもたらす音楽が、幼児の音楽表現とどのように関わるのか、乳幼児の音楽的な社会性を起点とし、乳幼児教育における領域「表現」と感情コミュニケーション、乳幼児の音楽表現と感情の発達の観点から検証を試みる。

Ⅱ　乳幼児期から始まる音楽的な社会性

本章では、音楽表現を導くスタート地点となるであろう乳幼児期から始まる音楽的な社会性について示す。

コールウィン・トレヴァーセン(以下トレヴァーセン)は、ブラッキングによる「音楽は生まれつき自然によって与えられた能力だが、他者との間で使われることによってはじめて意味をもち、機能する人間のコミュニケーションの１つのかたちである」を示し、音楽は言葉と同じように学ばなければならず、学ぶ過程で音楽に対する子ども側の感受性があり、(音楽を)表現していく子どもの側の発動性がはたらくとしている。[4]　ともすれば音楽表現は、大人も含めて奏者と作品との相互作用の結果から導きだされると考えられやすく、演奏者である子どもや大人が、それぞれの感性を通して、奏者の自律的な発動により演奏がなされると解釈されることが多い。しかしながら、そもそも乳幼児期においては、ブラッキングの指摘のように、音楽は母親や家族など身近で親しみのある他者との間に音楽を通したやりとりが行われることによって意味をもち、身近な他者と音楽を分かち合い、他者の笑顔や喜ぶ表情を見ながら、やりとりの中に何らかの喜びや快の感情が伴うことで、子どもたちの自然な発動により表現されるものなのではないだろうか。

トレヴァーセンは、赤ちゃんが音楽的な音に好んで注意を向け、音楽遊びを通してタイミングよく声やジェスチャーでこたえてくれることから、音楽の「内的意味」を求める動因としての音楽性が乳幼児期から生得的にあり、人間社会の文化的産物である音楽が人間の本性に深く根ざしているとしている。そして、音楽だけでなく、演劇、ダンス、詩などあらゆる時間芸術を含むものにおける音楽性の基本的な特徴は、乳幼児が周囲の人たちと種々の動因の表現をやりとりしあうなかで表れてくるとしている。トレヴァーセンは、ブラッキングによる「感情の文化」に関する議論の中での「科学的探究には情熱(passion)、芸術的構想には共感(compassion)が大切である」ことを示し、赤ちゃんが自分にも創造的な活動ができることを人にみせようとする姿から、他者との情動的な共感の重要な結果として周囲に認められるゆるぎない「アイデンティティ」が形づくられるとしている。[5]これらのことから、音楽以外にも、演劇、ダンス、詩などを含む表現活動の起源が、社会性の観点から考えると、乳幼児期から生得的に備わった「感情の文化」における情動を伴った共感が基盤にあり、それらの情動的共感を通して乳幼児の「アイデンティティ」の形成につながっているということがいえるのである。トレヴァーセンは、子どもが社会化するということは、社会で共有され尊重されているものごとの理解のしかたを自分(子ども自身)と分かち合おうとする相手を受け入

れることであり、習慣の違う文化では、人間関係やアイデンティティの個々の特徴は多様であっても、それらに価値を与える動機はすべての人間に共通であるとしている。[6] そうであれば先に示したように、音楽表現が奏者と作品との相互作用の結果からだけ導かれ、奏者の自律的な発動によりのみなされるのではなく、乳幼児においても、大人においても、社会で共有され尊重されている音楽文化への理解を分かち合うという姿勢をお互いに感じとり、相手を受け入れる行為であるといえる。

Ⅲ　感情コミュニケーション

本章では、自分自身の感情を伝達したり、相手の感情を認識したりする感情コミュニケーションに焦点をあて、感情コミュニケーションの媒体となる表情、声、身体接触の役割について述べる。

竹原卓真(以下竹原)は、私たちが一般にいちいち言葉に表さなくとも顔から感情を正確に読み取ってコミュニケーションを図ることが多いとしたうえで、乳児の表情認識能力について、成人でさえ識別がそれほどうまくない嫌悪と怒りの同定において生後10か月の乳児でも識別でき(Ruba et al.2018)、9歳の子どもと大人の表情認識を比較した研究で9歳児は大人よりも表情をよりポジティブだと評価したり、ポジティブ表情の覚醒度を大人よりも高く評価したりしたことを示している。(Vesker et al.,2018)[7]

声について、竹原は、感情コミュニケーションにおいて前述した表情と同じく重要な位置を占めており、私たちが相手の内的感情状態を声からしばしば無意識に推し量るとしている。(Pell& Skorup,2008)　一方、音楽に馴染みのある参加者を対象にした声や表情からの感情判断の研究(Weijkamp & Sadakata,2017)を示し、5年以上音楽訓練を受けたミュージシャン群は声と表情の感情が一致する場合はパフォーマンスがよく、たとえ不一致であったとしてもパフォーマンスのよさは変わらず、このことから、音楽の訓練そのものが音や視覚の処理に大きな影響があり、音楽に長期間携わることで感情判断が正確かつ頑健になる可能性を示唆した。[8]

身体接触について、竹原は、かなり効果的な感情コミュニケーションの1つであり、人間社会において重要な社会的役割があるとし、他者に触れる行為は自分の存在をその人にダイレクトに伝達する目的があり(大坊,1998)、他者との心的距離を埋めるきっかけとなると考えられている(相越,2009)ことを示した。そして、親子間の身体接触が子どもの発達過程や社会的発達に大きく影響し、身体接触が養育者への反応性やふれあいを促進する(Feldman et al.,2002;Jean et al.,2014)ことなど、人間の社会性の発達過程において養育者との間にどのような性質の接触が、どの程度なされたかがキーとなり、人間において愛着・仲間意識・親密さ・心地よさ・共感に加えて好きという感情に対して身体接触が重要な役割を担っていることを示した。(Hertenstein,Verkamp et al.2006)[9]

前章、本章に示してきたことから、保育者と乳幼児との感情コミュニケーションにおける温かみのある適切な表情、声、身体接触通して、音楽表現を分かち合う姿勢をお互いに感じとり、相手を受け入れることが大切であるといえる。

Ⅳ　乳幼児の表現活動と感情コミュニケーションの３要素

本章では、幼稚園における教育、保育所における教育、認定こども園における教育・保育で設定さてれいる「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の５領域の中から「表現」を取り上げ、それらの内容が前章で示した感情コミュニケーションとどのように関わっているのかを示す。

文部科学省「幼稚園教育要領」(2017 年)、内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(2017 年)では、領域「表現」が「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊にする。」と定義されている。

そして、領域「表現」がめざす「ねらい」として、(1)いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ(3)生活の中でイメージを豊にし、様々な表現を楽しむ　が掲げられている。

続く「内容」について、板野和彦(以下板野)は、表１のようにＡからＪまでの 10 項目に分け示している。[10)]

表１『一人一人を大切にする　ユニバーサルデザインの音楽表現』(2018)星山麻木編著　板野和彦著より転載

	幼稚園教育要領	保育所保育指針/幼保連携型認定こども園教育・保育要領 ①②:1 歳以上３歳未満児より、(1)～(8):3 歳以上児より
A		①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。
B		②音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。
C	(1)生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。	(1)生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
D	(2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊にする。	(2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊にする。
E	(3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。	(3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
F	(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。	(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
G	(5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。	(5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
H	(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。	(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
I	(7)かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。	(7)かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
J	(8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。	(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

ここでは、AからＪまでの領域「表現」での音楽表現を含む板野の解説を取り上げ、感情コミュニケーションの３つの要素(表情、声、身体接触)とどのように関わるのか、板野による解説の中から感情コミュニケーションの要素と関わる部分を抽出し、板野解説→感情コミュニケーションの要素、として示す。

Ａ：自然の中にある素材が子どもの創造性を刺激し、直接触れることによってさまざまなアイデアがわいてくる。→人間の他者ではなく自然との身体接触のみ。

Ｂ：歌は言葉をリズムとメロディーにのせて表現していくから、子どもにとって自分の内側(心)と外側へ表すこと(表現)とを結びつける。動きも伴わせるとその意味を高める。→表情や声により保育者と子どもが相互に感情を読み取る。保育者と子どもが動きによる軽度の身体接触から、愛着・仲間意識・親密さ・心地よさ・共感に加えて好きというポジティブな感情につながる。

Ｃ：子どもが触れ合う事物に保育者が気づき楽しむことで、子どもと楽しさを共有できる→保育者と子ども、相互に表情や声を通して楽しさを共有する。

Ｄ：子どもが美しいものに気づくために保育者の言葉がけが大切。保育者が実感した美しさを子どもに伝えることで、気づきが生まれ、表現に結びつく。→保育者の表情・声を通して、子どもは美しいと感じる感情を読み取り、子どもの美しいと感じる感情に気づく。

Ｅ：子どもが感動したことを友達や保育者と共有し、コミュニケーションを取り合うことで、感動や楽しさをより強く感じ取ることができる。→保育者や友達の表情や声を通して、子どもは楽しさを感じ取り、深く感動することにつながる。

Ｆ：子どもが「感じたこと、考えたこと」を表現するには、動きだけでなく、描いたり作ったり、即座に表現活動を実行する。→保育者と子どもが、描いたり、作ったり、動きによる軽度の身体接触から、愛着・仲間意識・親密さ・心地よさ・共感に加えて好きというポジティブな感情につながる。

Ｇ：シンプルな素材ほどイマジネーションが広がる。どうすればより楽しくなるのかアイディアを出し合い、一緒に考えることが大切。→話し合うなかで、保育者の楽しい表情・声を子どもが読み取り、楽しくアイディアを一緒に考えることにつながる。

Ｈ：歌の好きな保育者と触れ合っている子どもは歌や音楽が好きになる。→保育者の表情・声から、歌が好きという感情を子どもが読み取り、感じることで、子どもも歌や音楽が好きになる。

Ｉ：子どもが描いたり作ったりするプロセスを楽しむとともに、活用したり飾ったりし、感想を話し合う。→子どもの活動を保育者が楽しみ、保育者がそのプロセスと作品などの結果を大切に思う気持ちを表情や声で表すことで、子どもが感じとることができる。

Ｊ：子どもが自分の心のなかに描いたイメージをすぐに表現することは、まわりの人たちとのコミュニケーションを図るという意味でとても大切。表現することで、ほかの人から理解され、感動を共有できる。→子どものイメージの表現を保育者が表情や声を通して読み取るなかで、感動という感情を共有できる。

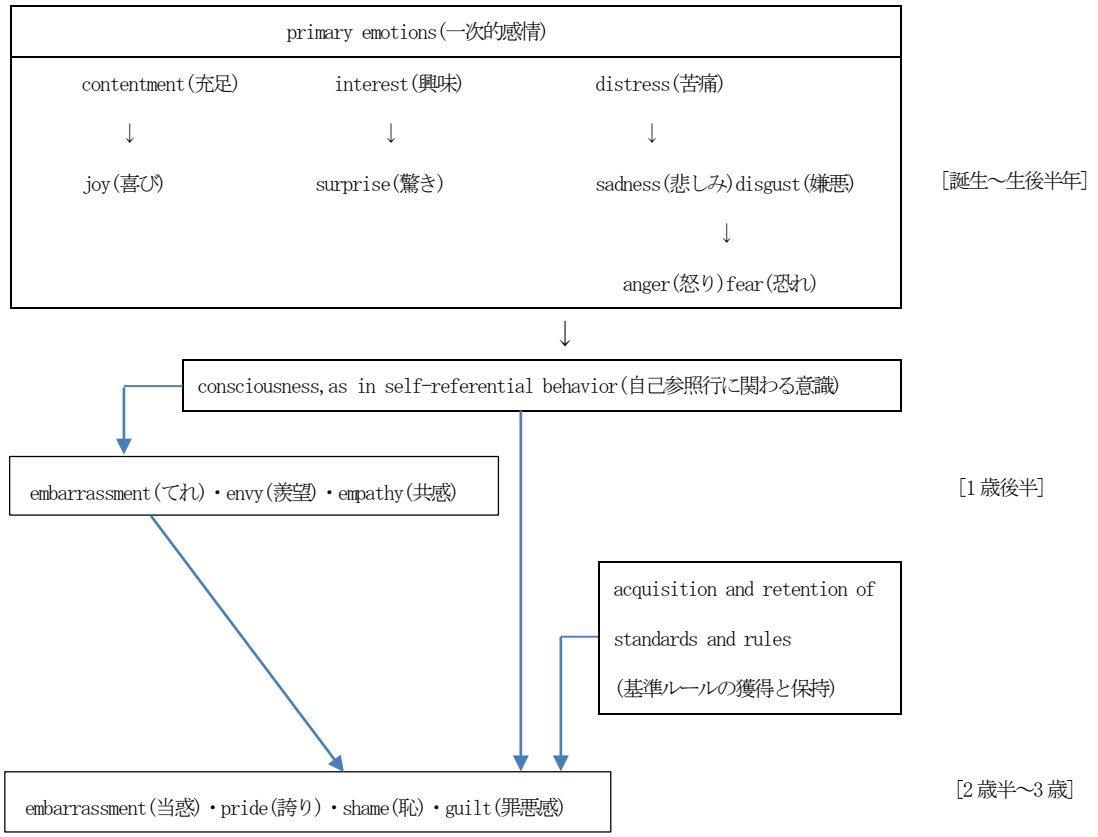
V　感情の発達

本章では、人間の感情の初期発達について示す。

尾上恵子(以下尾上)は、新生児から乳幼児期における人間の初期の感情発達が、その後の人との関わりに重要な感情理解や感情のコントロールの土台となるとしている。

尾上による出来事―認知的評価―表出の観点から感情の発達を検討したLewisの生後3年間の情動発達を表2に転載する。[11)]

表2 生後3年間の情動発達(Lewis,2000) 『感情心理学ハンドブック』(2019)　内山伊知郎監修　尾上恵子より転載



ここでは、新生児は感情や表情の意味を理解できないが、少なくとも快、不快を感じ、表出できるとされ、新たな認知能力の発達によりその後さまざまな感情に細分化、構成されていくとされている。そして、新生児の興味、充足、苦痛が生後数か月から半年にかけて、それぞれ、驚き、喜び、怒り、および恐れといった基本感情に分化するとされている。

尾上によれば、生後1年を過ぎるころから、自己と他者を区別できるようになり、イメージなど物事を思い浮かべる表象能力が現れ、1歳半前後になると自己意識や自己評価が関与する社会的感情が現れる。尾上はLewis(2000)から自己意識の発達により他者の存在を意識するようになり、他者との関わりから生じる感情が発達するとしている。表2のように、一次的感情がその後さまざまな感情へと分化されていくが、前述したように、自己意識の発達により他者の存在を意識し他者との関わりから生じる感情が発達するのであるから、保育者や身近な他者は、乳幼児の自己意識の芽生えについて、

注意深く見守り、音楽表現などを通して、乳幼児の創造性が発揮される場面に十分配慮し、子どもの自己意識を尊重することが大切である。

次に、これらの初期の感情発達に必要なこととして、尾上は、養育者と子どもが相互に表情や声、泣き声といったやりとりを受け止めあう情緒応答性(emotional availability)(Emde&Sorce,1983)に言及し、特に養育者である母親の情緒応答性が子どもの快感情の発揮や探索行動において重要であることを指摘している。生後間もない乳児においても、養育者の情緒応答性の不在が養育者そのものの不在よりも苦痛を示す(Field,1994)とされており、母親の自己中心的で相手に不快感を与えるといった情動表現スタイルが、子どもの否定的情動の生じやすさとの関係が認められている(田中,2009)

これらのことから、尾上が指摘するように、保育者や身近な他者と乳幼児との適切な相互作用を育むことが、感性や情操を育む音楽教育の基盤となる感情の発達に重要であるといえる。

Ⅵ　感情制御の発達

「認知・意志による制御」とされている感情制御について、大河原美以(以下大河原)は、「認知・意志による制御」の力は、発達に応じて年齢相応に育つものだが、年齢相応に「認知・意志による制御」の力が育つためには、その前に「安心・安全による(自動)制御」の体験が十分に必要であるとしている。[12)]　大河原によれば、乳幼児を指導(叱責)すればするほど、感情制御できない状況が悪化しとしまうという問題が悪循環として生じるという。大河原によれば、感情制御の発達とは、脳の中で不快感情とその身体感覚が自動制御される機能の発達を意味しており、赤ちゃんは、がまんする意志によって泣き止むのではなく、安心・安全の身体感覚に包まれることで泣き止むのであり、ここに感情制御の脳機能の発達の基礎があるという。子どもが、不安や恐怖などの不快感情を感じているとき、親(などの身近な他者)から「こわかったね」「いたかったね」「いやなんだね」という共感的な言葉をかけられることで、子どもは(自分の感情を)承認されることによる安心・安全を得て不快感情・身体感覚と、言葉とのつながりを学習する。このプロセスが感情の社会化であり、子どもの不快感情が言葉とつながると同時に安心に包まれて自動制御を体験していることになり、この「安心による制御」を乳幼児期に十分に体験している子どもは、成長とともに年齢相応に意志・認知による制御が機能するようになる。しかし、不安・恐怖・痛み・吐き気などの内的感覚を、親や教師・保育士などから否定されると、感情が社会化される機会を失い、体罰や虐待、厳しすぎるしつけがある養育環境、過剰に「よい子」であることを求められている養育環境にある子どもは、前述の流れから、本能的に怒りを抱えることになる。そして、「安心による制御」を十分に体験できずに育つ子どもは、「意志・認知による制御」が発達年齢相応に機能しないことになる。

これらのことから、保育者や身近な他者は、子どもの感情の社会化が健全に機能するよう乳幼児の音楽教育における表現を導く場面において、子どもの身体感覚を含む不快感情に十分配慮する必要がある。共感を伴う言葉がけを適切に行うことで、子どもは安心・安全を感じることができ、不快感情を自動制御できるようになる。それらの体験を十分することで、子どもは、将来自ら「意志・認知による制御」が発達年齢相応にできるようになるからである。

Ⅶ　感情の発達と音楽表現

本章では、星山麻木(以下星山)による表3年齢によるこころの発達と音楽表現について示したうえで[13]、Ⅴ章で示したLewisによる生後3年間の情動発達モデル及び基本感情に関する尾上の解説との関わりについて述べる。

表3年齢によるこころの発達と音楽表現『一人一人を大切にする　ユニバーサルデザインの音楽表現』(2018)星山麻木編著より転載

ステージ	年齢	こころの発達とキーワード		音楽表現で育てたいこと
7	5歳から	責任	自信・貢献	他者と自己の表現の広がり・イメージ
6	4歳から	他者への理解	友達・がんばり	友達と楽しむ・合わせる楽しさ
5	3歳から	指示理解	自制心	順序・歌や楽器の演奏の楽しさ
4	2歳から	意志	気持ちを伝える・仲間への意識	模倣・自分らしい表現
3	1歳から	コミュニケーションの広がり	相互作用・共感	共に楽しむ・やりとり・音の種類の広がり
2	6か月から	探索行動	特定の人への愛着・応答	他者と自己の表現の広がり・イメージ
1	0か月から	人への意識	安心	人の声や心地よい音への安心感

星山は、具体的にステージ1から7までの赤ちゃんの特徴とその年齢の乳幼児に対する大切なポイントについて表3を基に解説しているが、ここでは、前述したように、こころの発達と音楽表現が、感情の細分化を伴う感情の発達と関わる側面について述べる。尚、Ⅴ章で尾上は、表2、Lewisによるモデルでは「情動」、それに関する解説では「感情」を使用しているので、ここではそれに準ずる用語の使い方をする。

Lewisの情動発達モデルでは、一次的感情としての充足、興味、苦痛が、生後半年以内にそれぞれ喜び、驚き、悲しみや嫌悪から怒り、恐れに分化している。星山は、生後半年までのこころの発達に、(乳児の)人への意識と安心をあげ、音楽表現で人の声や心地よい音への安心感を育てるとしている。星山は、乳児が自分の世話をしてくれる人に意識的に微笑み、母親や父親など身近な人を認知するので、乳児に対して、優しい声かけをし、マッサージのように心地よくさせ、ゆっくりした動きや抱っこしながらの揺れを体験させることや、一緒に歌を聴いたり、一緒に歌を歌うことが大切であるとしている。星山の指摘する両親の認知を含む人への意識と安心感は、Lewisによる充足や興味につながり、優しい声かけ、心地よさ、ゆっくりの動きや抱っこの揺れは、乳児の喜びや安心感のある驚きにつながるといえる。生後半年までの乳児に対して、星山の提唱する一緒に歌を聴く、歌を歌う活動は、乳児が、Lewisによる一次的感情として、歌に興味をもち、歌を聴く、歌を歌う活動に喜びの感情を伴っていなければ、何らかの圧力や強制を乳児が感じることで、苦痛という一次的感情が、音楽表現と結びついて、悲しみや嫌悪、そこからの怒りや恐れといった尾上の指摘する基本感情に分化する可能性が十分あることに気をつけなければならないであろう。

生後半年から1歳で、星山は、(乳児の)探索行動と特定の人への愛着・応答をあげ、音楽表現で他

者と自己の表現の広がり・イメージを育てるとしている。星山によれば、この時期の乳児は、ひっぱる、さわるなど自ら意欲的に動き、共感を求め、親や特定の保育者がいなくなると不安になり、振ると音が出る、ひっぱると音が出るなど、簡単な操作で音が出る玩具を喜ぶ。乳児は、自分の身体をさわり、動いて自分の身体を理解する遊びをして、泣いたり、「あー」と声を出すことで、コミュニケーションしようとする。星山は、ここでは乳児に対して、探索行動を止めないで意欲を引き出し、安全な環境を調整が大切であるとしている。尾上は、生後1年を過ぎるころから、自己と他者を明確に区別できるようになり、イメージなど物事を思い浮かべる表象能力が現れるとしている。これらのことから、乳児に対して安全な環境をつくり、乳児の探索行動やLewisのモデルにあるような自己参照行を認め、自己と他者の区別や乳児のイメージに着目して、それらを引き出すような音楽表現が求められているといえる。

1歳から2歳で、星山は(幼児の)コミュニケーションの広がり、相互作用・共感を大切にしながら、音楽表現で共に楽しむ・やりとり・音の種類の広がりを育てるとしている。星山によれば、この時期の幼児は、じっとせず、立ち上がったり移動したり動き回ることで発達し、指さしや手ぶり、声の抑揚や強さで自分の気持ちを伝える。星山は、ここでは幼児に対して、(幼児が)自分で何でもやってみたいので、自分でできる意欲を育てることが大切であるとしている。尾上は、1歳半前後になると、自己意識や自己評価が関与する社会的感情が現れるとし、Lewisの情動発達のモデルから、(幼児が)鏡に映った自分を認識し、自分のことに言及できるようになり、他者との関わりから生じる感情が発達し、自己意識の芽生えにより発達するとされる照れ、羨望、共感につながっていく。尾上は、照れとは、自分が他者から見られていることで生じる感情であり、羨望とは、特定のものや性質を他者はもっているが、自分にはないことを意識し、羨ましいと感じることであり、共感とは、他者の気持ちを理解し他者と同様の感情反応を示すことで、特に他者の悲しみや苦痛といったネガティブ感情に対して慰めや援助、心配という形で現れることが多いとしている。これらのことから、幼児が他者とのコミュニケーションの広がりを感じ共感しながら音楽表現することが大切であるが、自己意識の芽生えからの照れや羨望、共感といった幼児の感情に十分配慮し、音楽表現において、照れを感じている幼児に無理やりみなの前でさせようとしたり、保育者が幼児と幼児を比較するような場面をつくり、結果として、幼児の羨望の感情を必要以上に増長させるようなことを慎み、幼児がみんなで共感を感じられるような音楽表現の場を設定し導くことが大切である。そうでなければ、Lewisの情動発達モデルにあるように、照れ・羨望・共感の感情から、2歳半から3歳にかけ過剰に幼児の当惑・誇り・恥・罪悪感の感情を醸成する可能性が十分にあると考えられる。また、Lewisの情動発達のモデルにあるように、1歳後半から2歳半の時期に、基準ルールの獲得と保持を指導することで、音楽表現における音楽作品との相互作用における規律的なものに対する自律的態度を育てることも同時期に大切であると考えられる。

星山は、2歳から3歳の時期に、幼児の意志や、気持ちを伝え仲間への意識が芽生えるとし、音楽表現で模倣や自分らしい表現を育てるとしている。星山によれば、この時期の幼児は、自分の意思がはっきりし、自分の気持ちを相手に伝えようとするとともに、仲間を意識し、ストーリー性のあるも

のや情緒豊かなものを好むようになる。音楽表現での模倣は、前述したLewisによる基準ルールの獲得と保持を含む活動であり、自分らしい表現がなかなかできない幼児に対しては、Lewisの情動の発達モデルにあるように、幼児の当惑や恥、罪悪感の軽減につながり、幼児の誇りを育てるような保育者の共感と優しさが大切であると考えられる。

Ⅷ　まとめと今後の課題

音楽は他者との間で使われることで意味をもち機能する人間のコミュニケーションであり、学ぶ過程での乳幼児の感受性がある。乳幼児にとって音楽性は、周囲の人たちとの動因となる音楽表現をやり取りをしあうなかで表れる。乳幼児が創造的な活動ができると人にみせようとし、他者との情動的共感を通して、乳幼児のゆるがない「アイデンティティ」が形づくられていく。すなわち、音楽、演劇、ダンス、詩などを含む表現活動の起源は、乳幼児期から生得的に備わった「感情の文化」における情動を伴った共感が基盤にあり、情動的共感を通して「アイデンティティ」の形成につながっていく。音楽表現は、人間相互の社会で共有され尊重されている音楽文化への理解を分かち合うという姿勢をお互いに感じとり、相手を受け入れる行為が前提にある。音楽表現における保育者と乳幼児の感情コミュニケーションでは、温かみのある表情、声、身体接触通して音楽表現を分かち合う姿勢をお互いに感じとり、相手を受け入れることが大切となる。

保育者と乳幼児との相互作用が、音楽教育の基盤となる感情の発達に重要であり、保育者は、乳幼児の自己意識の芽生えを見守り、音楽表現における乳幼児の創造性に配慮しながら乳幼児の自己意識を尊重することが大切である。

乳幼児は、身近な他者に承認される安心・安全を通して、不快感情の身体感覚と、言葉とのつながりを学習する。乳幼児は、不快感情が言葉とつながると同時に安心に包まれることで、不快感情や身体感覚に対する自動制御を体験する。この感情の社会化である「安心による制御」を乳幼児期に十分に体験している子どもは、成長とともに年齢相応に意志・認知による制御が機能する。

保育者は、乳幼児の感情の社会化が健全に機能するように、音楽表現を導く場面で子どもの身体感覚を含む不快感情に十分配慮する必要がある。音楽表現教育では、保育者が共感を伴う言葉がけを行うことで、乳幼児は安心・安全を感じることができ、不快感情を自動制御できるようになる。

生後半年までは、乳児が保育者と一緒に歌を聴き歌を歌う活動は、乳児が歌に興味をもち、乳児の喜びの感情が伴わなければ、乳児が何らかの圧力や強制を感じる苦痛が音楽表現と結びつき、そこから悲しみや嫌悪、怒りや恐れといった感情に分化する可能性をはらんでいることに十分配慮が必要である。

生後半年から１歳では、乳児に安全な環境をつくり、乳児が他者と区別したり、乳児のイメージを引き出すような音楽表現が求められる。

１歳から２歳では、幼児が他者とのコミュニケーションの広がりを感じ共感する音楽表現が大切だが、音楽表現において、自己意識の芽生えからの照れや羨望、共感といった幼児の感情に十分配慮することが大切である。それらの照れ・羨望・共感の感情は、２歳半から３歳にかけて、幼児の当惑・

誇り・恥・罪悪感の感情に分化する可能性をはらんでいる。また、1歳後半から2歳半では、音楽表現で音楽作品との相互作用において規律的なものへの自律的態度を育てることが大切である。

2歳から3歳では、音楽表現において、自分らしい表現がなかなかできない幼児に対しては、幼児の当惑や恥、罪悪感の軽減につながる保育者の共感と優しさが大切である。

誕生から生後半年に乳児の感情の分化が発生する。音楽表現は感情を伴うので、乳児期の極めて早い時期から感情への十分な配慮が必要である。感情への十分な配慮の伴った音楽表現教育の実践に向け、さらなる先行研究の検討を行うことが今後の課題となる。

引用文献

1）『感情心理学ハンドブック』(2019)　内山伊知郎監修　荘厳舜哉　日本感情心理学会 p.2

2）『音楽と感情　音楽の感情価と聴取者の感情的反応に関する認知心理学的研究』(2007)谷口高士　(株)北大路書房　p.2

3）同掲書 2)p.3

4）『音楽アイデンティティ　音楽心理学の新しいアプローチ』(2011)レイモンド・マクドナルド、デイヴィッド・ハーグリーヴズ、ドロシー・ミエル編者　岡本美代子、東村知子訳　コールウィン・トレヴァーセン　(株)北大路書房　pp.29-30

5）同掲書 4)pp.31-32

6）同掲書 4)p.49

7）同掲書 1) 竹原卓真　pp.144-147

Ruba,A.L.,Johnson,K.M.,Harris,L.T.,&Wilbourn,M.P.(2017).Developmental changes in infants' categorization of anger and disgust facial expressions. *Developmental Psychology*,53,1826-1832

Vesker,M.,Bahn D.,Dege,F.,Kauschke,C.,&Schwarzer,G.(2018). Perceiving arousal and valence in facial expressions: Differences between children and adults.*European Journal of Developmental Psychology*,15(4),411-425

8）同掲書 1) 竹原卓真　pp.147-150

Pell,M.D.,&Skorup,V.(2008).Implicit processing of emotional prosody in a foreign versus native language.*Speech Communication*,50,519-530

Weijkamp,J.,&Sadakata,M.(2017).Attention to affective audio-visual information: Comparison between musicians and non-musicians.*Psychology of Music*,45,204-215.

9）同掲書 1) 竹原卓真　pp.150-151

大坊郁夫(1998).しぐさのコミュニケーション―人は親しみをどう伝えあうか―　サイエンス社

相越麻里(2009).身体接触の臨床心理学的効果と青年期の愛着スタイルとの関連　岩手大学大学院人文社会研究科紀要,18,1-18

Feldman,R.,Eidelman,A.I.,Sirota ,L.,&Weller,A.(2002) Comparison of skin-to- skin

(kangaroo) and traditional care:Parenting outcomes and preterm infant development. *Pediatrices*,110,16-26.
Jean,A.D.,Stack,D.M.,&Amold,S.(2014). Investigating maternal touch and infants' self-regulatory behaviours during a modified face-to-face still-face with touch procedure.*Infant and Child Development*,23,557-574.
Hertenstein,M.J.,Verkamp,J.M.,Kerestes,A.M.,&Holmes,R.M.(2006). The communicative functions of touch in humans,nonhuman primates,and rat: A review and synthesis of the empirical research. *Genetic,Social,and General Psychology Monographs,132,* 5-94.
10)『一人一人を大切にする　ユニバーサルデザインの音楽表現』(2018)星山麻木編著　板野和彦著 (株)萌文書林 pp.10-12
11) 同掲書 1) pp.226-231
Lewis,M.(2000). The emergence of human emotion.In M.Lewis,&J.M.Haviland-Jones(Eds.), *Handbook of emotions* (2nd ed.,pp.265-280). New York:Guilford Press.
Emde,R.N.,&Sorce,J.E.(1983). The rewards of infancy:Emotional availability and maternal referencing. In J.D.Call,E.Galenson,&R. Tyson (Eds.), *Frontiers of infant psychiatry* (Vol.2.,pp.17-30). New York:Basic Books. Edward.A.,Shipman,K.,&Brown ,A.(2005). The socialization of emotional understanding:A comparison of neglectful and nonneglectful mother and their children.*Child Maltreatment*,10(3),293-304.
Field,T .(1994).The effects of mother's physical and emotional unavailability on emotion regulation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*,59,208-227
田中あかり(2009).母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響　発達心理学研究, 20(4),362-372
12) 同掲書 1) pp.231-233
13) 同掲書 10) pp.30-33

Abstract

For infants, musicality is manifested in the exchange of musical expressions with those around them. The interaction between the caregiver and the infant is important for the development of emotions that are the basis of music education. It is important also for the caregiver to respect consciousness of infants, watching the emergence of the infant's self-consciousness and considering the infant's creativity in musical expression.